

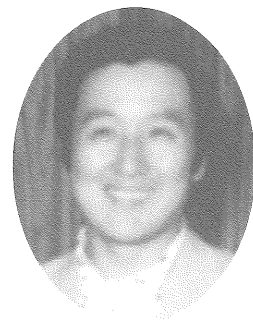
ダイヤモンドは何かですか？

ダイヤモンド

—EAVのドクター・フォルと
意識指数のデヴィッド・R・ホーキングズ博士に
敬意を表して—

田村(・タカ・)熾鴻
(本名・富保)

完璧なカットが世界で初めて完成 (1985年10月)
次々と起こる七つの不思議
誘われた世界は、霊的世界、意識界
学んでみれば、鉱物にも意識あり
そして今、人の心身を完璧に調整し、癒し、尚
意識を高めるエネルギーとなったダイヤモンド
エイトスター
そんなダイヤモンドと人との関係を
研究するのが、ダイヤモンド道。



なんと言う日だ。5月29日 午後3時20分、湯川から電話があった。続いて、3時47分、フラメンコ・ダンサーの長嶺ヤス子さんからも電話。二人は中学・高校の同窓生。共に81歳で今も現役で活躍。二人の用件はまったく違ったけれど、少なくとも81歳までは元気でいられることを示唆させられているかの共時性だった。

湯川の用件は超感動！信じられない話だった。まるでマジカル・ミステリー。あり得ない写真が手に入って、「そこに写るあなたの笑顔がとても素敵だから、送りました」というものだった。「何、その写真？」って私。

あのエルヴィスに楽屋で会った時に撮られた写真が、ネット・オークションに出ていて、大津市に在住のHさんが見つけて落札され、その写真を湯川に送って下さったというのだ。

「あの写真は、一緒に行った木崎さんが撮ったんじゃないの？」

「違うわよ。エルヴィス専属のカメラマンだったのよ。そのカメラマンが、ネット・オークションに出したらしいの」

「それを見つけた人がいたって言うの？ 日本人で？ 奇跡的じゃない！」

「そうなのよ、その中の一枚の写真、あなたの笑顔が良いから、送っておきます」

どんな笑顔かは分からなかった。

実は去年、腰痛を改善する為に、山蔭神道の節分祭の折に授与された守護の木札を腰に入れた写真を2月に発行した88号天声私語に掲載した。この写真を見れば、この年に何が起こったかを思い出せる、この年のベスト・ショットとして発表した。「毎年、ベスト・ショットとして写真を積み重ねていったら一生が一瞬で思い出せるね」って、「毎年ベスト・ショットを飾りましょう」、なんて書いたばかりだった。

そんな時にやってきた今回の情報は、写真を見る前から分かった。それは、吾が人生のたった一刻だったけれども、ベストを越えたエクセレント・ショット。それが来たらしい。

1973年8月10日。その日の午後、結婚式を挙げて、夜にステージ前のエルヴィスに会うという夢が叶った日、吾が人生でこれ以上ない最良の写真だからね。しかも、笑顔が素敵と湯川が褒めてくれた一枚。

届きました。30日午前10時半過ぎ。湯川の一言が添えられていました。

「今だからこそ、こんな写真貰っても喜んで人に見せられるし、飾って置けるし……。良かったね！ 神様は全部ちゃんと見てくださっているのネ！ エルヴィスにも感謝です」有り難う御座います。

写真は、すでに湯川側の情報として世に出ている三人のショット。最近では、右側に立つ私がカットされたエルヴィスと湯川のツー・ショット。そのオリジナルの連続写真の中の一枚が、右側にいる私が微笑んでる。こんな一枚、ある

ことさえ知らなかった。微笑んでる…w!!

それを見たスタッフの一人が「心ちゃんがそっくり」って。俳優志願の息子のこと。人の見る目には、そんな感じが優先するんだって思いながら、心の内では結婚までの吾が人生が一瞬にして蘇った。特に、女性と関わる吾が人生が……。

私が一切女性を口説かなくなったのは、22歳の時から。原因は3歳の時に発症した喘息だった。

22歳の元気な時に、それは一気に3回起きた。喘息は私の負の部分。人に知られたくなかった。だからこそ、起こったのか。人は3回同じことが起こったら完全に戻込む。まず1回目は、喘息のキッカケの呼吸の異常が起こり、入ったばかりのそういう場にいられなくなった。そのままそこにいたら間違いなく呼吸困難が起こり、女性にサヨナラをされる。止むを得ず、「急に用事を思い出した。家に帰らなければならない」と言って、入ったばかりのその場を出た。3回の内の2回の原因は、陰湿な部屋の空気だった。

そのことから、喘息には二つの種類があることを悟った。名付けて湿式と乾式喘息。私の喘息は気管が細くなる湿式。だから、梅雨の時は苦しんだ。咳が出る喘息は乾式で湿気が良くなる条件だった。だから私の転地療法は長野県辺りでは駄目で、札幌の地が必要だった。

そうした言い訳が嫌になる3回目は、12月24日イブの宵^{よい}に起こった。買って行ったシャンパンがアルコール入りとは知らずに一気に飲み。私が知っていたシャンパンはサイダータイプ、お子さま用。酒が飲めない私はシャンパンのすべてはサイダータイプと思って買い、そういう場に入って「乾杯！」って一気に飲みしたわけ。

一気に起こった呼吸困難。連れは驚き、女将を呼んだ。その女将、私を一瞥し、「この人どこの人？ 家まで送ってあげなさい」と女性にタクシー代を渡してタクシーを呼んだ。そして、小金井の自宅前まで送られて、彼女ともそれっきり……。

3回とも、一吸いで即刻発作が治る喘息薬メジヘラー・イソを持ち歩いていなかった。元気な調子の良い時に、そして、肝心な時に発症した。それ以来、女性を口説くことをしなくなった。出来なくなった。(46歳で開けた吾がスピリチュアル人生。「カルマの法則」を学んだ時に、これで良かったんだ、と思えた。

カルマ返し！ どころか、カルマ増しするところだったって！)

そして10年後の32歳の時、その牙城を崩したのが、湯川だった。エルヴィスのハワイ公演・宇宙中継・放映録画のビデオ・テープとビデオ・コーダー販売を経て交際するようになり、プロポーズをされた。しかし、私も生意気盛り、「君は、外を連れて歩くには良いけど、家庭の人じゃないから……」と断った。だが、交際は彼女の仲間たちと一緒に結構深まっていった。音楽評論家たちの前でギターの弾き語りなどして度々楽しんだりもした。そんな時に、妹の一家が親父・お袋を招いて食事会を開いてくれた。何と、両親が湯川を気に入ってベタボメ。

それでもその後、2度目のプロポーズをされた時には、断り文句のつもりで、「俺、喘息があるから、結婚できない」って初告白。湯川曰く、「そんなの治してあげるわよ」。

ずっと気にしていた吾が負の心を受け入れてくれたのだ。だが、それでもOKせず、時はちょっと進んでの3回目のプロポーズ。これなら文句なくギブアップするだろう、と思って言った断り文句の一言が、「エルヴィスに会わせてくれるなら……」だった。さすがに出来るとは思わなかった。しかし、彼女は実行した。条件を呑まれたら、もう断る路が閉ざされてのラス・ヴェガス行き……。

午後に教会で式をして、夜のステージ前の楽屋に行った時の写真が、まさかの道筋で届いた、というわけである。湯川はその後、教会で出された結婚証明書にサインをおねだりして、結婚の証人になってもらっただけでなく、キスマまでしてもらい、というオマケまで付いた。(オレモシテモライタカッタ!!)

私にとっては、正真正銘の人生のベスト・ショットを越えたエクセレント・ショット。二つの願いが一気に叶って一つになった時の感無量の、少し控え気味に二人の後ろで微笑む一枚なのである。この写真、幻ではなく、存在すら知らなかった一枚なのである。

因みにエルヴィスが右手に持っているのは、ハワイ公演のレコードが日本で25万枚売れた記念のゴールド・ディスク。これを届けるという理由での面会だった、と後から聞いている。

しかしこの旅には、喘息を治してあげると言った湯川にも、実は私にも人生最悪、死が脳裏をよぎる程の喘息を起こすというオマケまで付いていた。

帰国する前日の晩の、荷物整理。荷物は増えていた。購入したジャケットは収納用の厚手のビニール製袋入り。ウォーキング・クローゼット（当時、日本ではまだ見たこともない時代）の中で、トランクに空きスペースを作る為に他の衣類を出来る限り詰め込んだ。もう、これ以上無理というところまで詰めた後、少しでも薄くしようとビニール袋を壁に押しつけ、空気抜きをした。その瞬間だった。急激な呼吸困難。その場で一気に喘息発症。狭い空間でビニール袋から出た空気を吸った瞬間だった。しかも、半端な状態ではなかった。いつものメジヘラー・イソを吸引する。一発で治る筈が効かなかったばかりか、余計にひどくなる。初めての経験。使えば使うほど重症となる。息が吸えない。息が入るスペースが肺に無くなっている。ベッドに横たわりながら、「死ぬかもしれない」、と初めて思った。

唇は真っ青だったらしい。慌てふためく湯川がフロントへ電話。黒人の大男がやってきた。見下ろすだけで、慌てていない。慣れている。ちょっと、安心したことも憶えている。そして運ばれた病院。医師の対応の遅さに、「急いで注射してくれ」と手振りでせがむ。注射さえしてもらえば一瞬に治る。でも、医師はゆっくりと酸素ボンベを用意しながら、「注射は危ない」と言う。始まった酸素吸入。一瞬の効き目を期待した心は裏切られる。そうして、ようやく落ち着いたのは30分後。喘息は、呼吸さえ楽になればいつもの自分。診察室から出て来た私を見て、湯川は口に手を当てて驚いていた。喘息を治してあげると言ってくれた湯川への現実の洗礼は、死の淵を覗き見るかのように強烈だった。そして、吾が身にも……。

後に納得したアメリカの病院での喘息治療法。大正解だった。急激に治す気管拡張剤の喘息薬や注射は、使う度に心臓に負担をかける。だから、1973年当時すでにアメリカでは時間をかけて元に戻す方法として、酸素吸入に弱い気管支拡張剤を入れての治療法が確立していた。進んでいましたアメリカ医療。なのに、吾が喘息は続き、一瞬で楽になる“メジヘラー・イソ”を使いつづけた。

しかし、それから17年の間をおいて、吾が身に助けがやってくる。それはその後の人生を大きく左右するものとなった。完璧なカットと心（気）が完成

したダイヤモンドが引き寄せたのは、ドイツの葉選びに使われていたEAVだ。50歳の時。15歳から使っていたメジヘラー・イソをEAVで測定し、その数値の悪さに愕然。初めて、これは使ってはならない、と真剣になって医師に相談。そして、86号で既報のEAVオール50の“メプチンエアー”に救われて、5年後の55歳で喘息完治となる。

3歳から52年間の修行だった。元気なのだから、必要ない修行だったかもしれないが、メジヘラーを使いつづけていたら、65歳で起こった心筋梗塞の際、生命に関係していたかもしれない。そして今、76歳、元気に生きている。120歳に向けて…。

吾が人生に喘息あり。その喘息の大元が、実は三つ児の魂に関係していたとは、73歳で解消したから言える「起承転結」であります。

最後に、文頭に登場の長嶺ヤス子さん、お会いしてみたら、用件はチケットの話。公演の度に、自ら手売りで販売されているとか。この日はまず、一週間後6月5日の「飢餓海峡」のチケット。108名の小さな会場八重洲ホール公演の集金。私にとって、二回目のステージでした。息づかいまで聞こえる小さなホールでの公演は素晴らしかった。魅せられました。81歳のお歳を忘れさせる熱演。改めて、凄い人だと、その情熱と成りきり方に頭が下がりました。スペインのトップ・クラスのダンサーとの二人舞台でしたが、彼が長嶺さんを大事にする気持ちが伝わってきて感動もしました。

スペインやニューヨークでも評判になった、日本人フラメンコ・ダンサーのステージ、一度は観ておくのも人生の記憶に残るショットになることでしょう。

次回の公演は、

11月27日(月)と28日(火)八重洲ホールにてフラメンコの踊りの会。スペインからミュージシャン5名。ダンサー2名来日、共演します。午後7時開演。チケットは、20,000円。その次が、

12月6日(水)新宿文化センターにて「邪宗門」。午後7時開演。チケットは、15,000円。おつなぎ致します。

ご希望の方は03-3359-8881 エイトスター・ネットワークまでご連絡ください。長嶺さんは、犬・猫それぞれ100匹以上と生活していることでも知られています。